

『逍遙遺稿』 札記

——狂痴詩其六について——

中野逍遙と佐々木信綱

明治二十五年十一月、当時文科大学漢学科に在学中の中野逍遙（重太郎）は、自ら狂骨子と号し、浅草は今戸に居を構える親戚筋の宇都宮氏宅に寄寓していた。その下宿に、十月頃より夜ともなると、残月子こと佐々木信綱が神田小川町の自宅からほぼ一日おきに訪ねて来るようになっていた。たがいに益友とも心友とも認め合っていた二人は、酒を前にして人生を論じ文学を語り、青春の悩み恋の苦しみを訴えて、大いに気焰をあげ憤懣をぶつけあっていたのである。時に逍遙二十六歳、信綱二十一歳。ともに多感な青年であった。父佐々木弘綱から英才教育を受けて育った信綱は、「歌林の名材」^{（注3）}として既に世間の注目を浴びつつあった。日頃口数少なく、「資性狷介」^{（注4）}で「常人と相容れず」、「交際も餘り博からざる方」^{（注5）}の逍遙にとって、この五歳年下の新進気鋭の歌学者は心おきなく話のできる数少ない友人であり、信綱の方でも胸襟を開いて語らえるのは、この逍遙の

他になかった。そして二人は、学ぶところは異なっても、共に文学に志し、ゆくゆくは手を携えて文界を指導せんと誓い合う同志でもあった。ともすれば談は深更に及んだ。座には逍遙・信綱の他に、逍遙の寄寓先の宇都宮夫人と逍遙の従妹で御茶の水の女子高等師範学校に通う富田愛子という二人の女性の姿が見えることもあった。

その頃、逍遙は信綱の家の筋向いに住み竹柏園で和歌を学んでいた上州館林出身の銀行家の女、南条貞子二十二歳に狂おしいまでの思慕の情を抱いており、信綱は信綱で房州北条（現在、千葉県館山市の一部）に居るとある少女に心を寄せていた。すなわち、「残月子の心は磯松に傾き、狂骨子の情は南枝に鍾」^{（注6）}つていたのである。両者両様に恋の炎に身を焦し、熱に浮かされて放言を繰り返す。黙していればやるせなく、身のおきどころがないようであったまれない。言葉にすれば彼の女への怨みがつり、ますます感情が激しくなる。傍らに侍してじっと耳を傾けていた夫人からは、不意に遠慮容赦のない痛烈な評語が浴びせられた。神妙そうに話を聞いていた従妹もそれにつられて思わず笑いこぼる。南条貞子とは同学でや

二 宮 俊 博

はり一緒に信綱から歌の手ほどきを受けていた愛子にしてみれば、一方の当事者どうしを知っているだけに、従兄たちの深刻そうな表情やいかにも感に堪えぬといったふうの口吻は、微笑ましくはあっても内心噴き出したくなるような代物であったに違いないし、世智にたけた夫人には、青年たちの胸の中を多少理解できたとしても、所詮たわいもない世迷言としか聞えなかったであろう。だが、二人の青年は真剣そのものであった。そんな雰囲気の中、ある晩、興たけなわに達した時、微醺を帯びた一人が突然筆を把って書いた。

昨夜春風入紫閣 昨夜春風紫閣に入る

燈華ト喜對孤榻 燈華喜びをトして孤榻に對す

問黃鶯兒之意中 黃鶯兒の意中を問へば

只指南枝笑不答 只だ南枝を指して笑って答へず

酔わざる者も同様に紙を引き寄せ題していう、

ともにみし沖のしま邊の磯馴松秋風いかにさむくふくらん

以上は、「狂残銷魂録」第一及び「狂残痴詩」十首並びにその後書から窺い知られる中野逍遙と佐々木信綱との隔夜の文談の様子である。これらの作品は、いずれも中野逍遙の没後に編纂された『逍遙遺稿』外編に収められているが、この他、明治二十五年十月の「城南評論」第八号にも狂骨残月二子の雨夜の品定めならぬ「雨夜文談」が載せられている。

佐々木信綱の歌

今、ここに引用した「酔わざる者」こと残月子、佐々木信綱の歌は「狂残銷魂録」第一に見えるものである。この作品は、その後、

森鷗外の「めざまし草」まきの十（明治二十九年十月）に「をちかた人」と題する詠草の一首として発表され、更に信綱の第一歌集である『思草』（明治三十六年十月 博文館）にも収録された。雑誌や歌集に載せられた際に、多少表記が改められており、『思草』では、共に見し沖の島べの磯馴松あき秋いかに寒く吹くらむとなっている。

ところで、この信綱の歌は、彼が房州北条にいる恋人の身の上を遠く思い遣って詠じた作品であるが、それを竹柏園門下の歌人川田順は「おもひ草評釋（五）」（「心の花」昭和二十八年六月号）の中で、次のように解説している。

「沖の島べ」は房州北条から眼前に見える「沖の島」のことで「島べ」の「べ」は單なる接尾語である。作者はおなじ町内（神田區小川町）に住んでゐた中野逍遙と親しかつた。多感の詩人逍遙は、これも小川町に住んでゐた銀行家南條なにがしの令嬢に想ひを懸けたが、その令嬢は琴を上手に弾いた。逍遙の漢詩その他の作品に、しばしば琴の音が現はれる。浪漫主義者の逍遙にはいま一人、房州北条に、戀人ならぬ戀人が居つた。信綱先生は逍遙と一緒に北條へ赴き、その女性も加はつて、共に沖の島に遊んだ。右一首は歸京してからの作で、逍遙の心になつて作つたものである。（後略）

川田順のこの評釈は、最近でも佐佐木幸綱氏の『日本近代文学大系55 近代短歌集』（昭和四十八年九月 角川書店）や『短歌シリーズ・人と作品 佐佐木信綱』（昭和五十七年六月 桜楓社）において、そのまま踏襲されている。

しかしながら、中野逍遙の「狂残銷魂録」その他の作品を読むかぎりでは、逍遙にいま一人恋人ならぬ戀人が房州北条に居たとか、

信綱が逍遙の心になって「沖の島べ」の歌を詠んだとかいう川田順の説明は、ずいぶんおかしいものになってくる。逍遙と信綱と同じ町内に住んでいたというのも事実誤認であろうし、二人が一緒に房州に遊んだことがあるかどうか疑問に思われる。だが、それよりも、逍遙の作品中に琴の音がしばしば現われていることに着目し、それを琴を善くした南条貞子と結びつけて的確に指摘している川田順が、全く『逍遙遺稿』に眼を通していなかったとは到底考えられず、どうしてかかる評釈がなされたのか理解に苦しむ。何かいwakがあるのだろうか。^(注)

又、この歌の制作時期に関して、佐佐木幸綱氏が前掲『近代短歌集』の補注で、「信綱『房総漫吟』中に、北条、沖の島の歌があり、それから推察して、明治三三年の作か」と述べておられるのは、この歌の初出を「めざまし草」とされていることからすれば解せぬことであるし、そもそも、佐佐木幸綱氏の場合、『逍遙遺稿』それ自体を見ておられなかったのではないかと疑われる。信綱の『作歌八十二年』（昭和三十四年五月 毎日新聞社）に拠れば、信綱は明治二十五年、二十一歳の時「晩春の頃、安房北条在の小原氏に招かれてゆき、北条の歌会に列なり、沖の島、鷹の島に遊び、奈古から帰った」ことがある。たんなる臆測に過ぎぬが、あるいはこの折の北条の歌会で知り合った女性がいて、信綱はその人に恋したのかも知れない。

生前まとまった著書を一冊も刊行することなく、明治二十七年十一月享年僅かに二十八歳で急逝した中野逍遙とは全く対照的に、佐々木信綱は昭和三十八年十二月に没するまで九十二歳の長寿を保ち、歌壇の重鎮、国文学界の耆宿として多大の業績を挙げ数多の門流を育成した。人柄に圭角なく温雅謹直そのものであったらしいこの人は、歌道に文献学にと文火の如く絶えることのない心熱を燃や

しつつけたが、その若き日の感情の昂ぶりを伝える貴重な証言として、逍遙の「狂残銷魂録」や「狂残痴詩」等の作品は見過せぬであろう。

狂残痴詩其六

さて、ここでは逍遙の「狂残痴詩」十首の中から、其六を取り上げてみたい。この作品は全体が四解に分かれ、逐解押韻格の古体詩である。次に全文を掲げ、解ごとに簡単な語注を付しておく。訓み方は、おおむね岩波文庫本『逍遙遺稿』の笹川臨風・金築松桂の訳文に従い、必要に応じて振り仮名を付け加えた。

- | | |
|------------|----------------|
| 1 主人狂骨奇感士 | 主人狂骨は奇感の士 |
| 2 客残月有情人矣 | 客残月は有情の人 |
| 3 人世境遇歎飛蓬 | 人世の境遇飛蓬を歎じ |
| 4 主客相見共揮淚 | 主客相見て共に涙を揮ふ |
| 5 主人有酒留客飲 | 主人酒有り客を留めて飲み |
| 6 氷心投在玉壺裡 | 氷心投じて玉壺の裡に在り |
| 7 一杯銷憂十杯笑 | 一杯憂ひを銷し十杯笑ふ |
| 8 百杯僅當中宵醉 | 百杯僅かに中宵の酔に當る |
| 9 主人狂骨襟先沾 | 主人狂骨襟先づ沾ひ |
| 10 客殘月子嗣拭眦 | 客残月子嗣いで眦を拭ふ |
| 11 二子淚華分南北 | 二子の淚華南北に分かれ |
| 12 一向高臺一碧水 | 一は高台に向ひ一は碧水 |
| 13 碧水茫茫看不盡 | 碧水茫茫として看れども尽きず |
| 14 只有秋色涵千里 | 只だ秋色の千里を涵す有り |
| 15 話到南北銷魂處 | 話し到る南北銷魂の処 |

- 16 滿堂無聲夜欲死 滿堂声無く夜死せんと欲す
 17 冷語忽落夫人評 冷語忽ち落つ夫人の評
 18 淑女嘲笑次之起 淑女の嘲笑之に次いで起る
 19 無情漫付有情心 無情漫りに付る有情の心
 20 報酬何聞感慨地 報酬何ぞ聞かん感慨の地
 21 他人不許問我憂 他人は我が憂ひを問ふを許さず
 22 知二子者二子耳 二人を知る者は二子のみ
 ○奇感 並はずれて感傷的なこと。○飛蓬 風に吹かれて飛ぶよもぎ。
 飄蕩して定まらない状態をいう。○氷心 清らかな心。王昌齡の「芙蓉樓にて辛漸を送る」詩（『唐詩選』）に「一片の氷心玉壺に在り」と。○高台 駿河台を指す。逍遙が思いを寄せた南条貞子が住む。○碧水 東京湾の彼方、房州北条に信綱の愛する人が居た。○銷魂 悲しみや愁いに沈んでぼんやりすること。腑抜けの状態になること。江淹の「別れの賦」（『文選』）に「黯然として銷魂するは、唯別れのみ」と。
 23 憶他玉鏡忽破春色移 憶ふ他の玉鏡忽ち破れて春色移り
 24 百年金誓渾堪悲 百年の金誓渾べて悲しむに堪へたり
 25 緑鬢不似去年様 緑鬢去年の様に似ず
 26 斜街低首立多時 斜街首を低れて立つこと多時
 27 別後紅顔無恙否 別後紅顔恙無きや否や
 28 何人彩筆畫娥眉 何人の彩筆ぞ娥眉を画く
 29 吾愛南家玉芙蓉 吾れは愛す南家の玉芙蓉
 30 仙香含霧倚太池 仙香霧を含んで太池に倚る
 31 風來忽吹楊妃粉 風来って忽ち吹く楊妃の粉
 32 月到偏照西施脂 月到りて偏へに照らす西施の脂
 33 嬌夢只合天上棲 嬌夢只だ合に天上に棲むべし

- 34 枉使人妬蛺蝶枝 枉げて人をして蛺蝶の枝を妬ましむ
 ○玉鏡忽破 結婚の約束が反故になること。○春色 春景色の意ではなく女性の容色。○百年金誓 一生添い遂げることを誓った固い約束。○緑鬢 女性の美しいまげ。○斜街 繁華な街なか。○画娥眉 妻のためにまゆ墨で眉をかいてやること。前漢の張敞の故事（『漢書』卷七六）。○南家 南条家を指す。○玉芙蓉 美しい蓮の花。○太池 長安にあった太液池。白居易の「長恨歌」に「帰り来たれば池苑皆旧に依る、太液の芙蓉未央の柳」とあるそれ。○楊妃 楊貴妃。西施とともに中国の美女の代表格。○嬌夢 貞子のみるかわいらしい夢。○天上棲 棲字、岩波文庫本は樓に作る。○蛺蝶 ちょうちょう。仲睦まじいものの喩え。
 35 半生為客心魂碎 半生客と為って心魂碎け
 36 萬卷破書知感慨 萬巻書を破って感慨を知る
 37 漫投文海決百川 漫りに文海に投じて百川を決し
 38 誤溯情源之九派 誤って溯る情源の九派
 39 枕上明星光陸離 枕上の明星光陸離
 40 筆端幽鬼影靈恠 筆端の幽鬼影靈恠
 41 秋琴臺畔風露沈 秋琴台畔風露沈み
 42 春夢閣外紅紫褪 春夢閣外紅紫褪す
 43 旅亭酒醒獨對燈 旅亭酒醒めて独り燈に對し
 44 緑鬢之下寸丹在 緑鬢の下寸丹在り
 ○万巻破書 杜甫の「韋左丞丈に贈り奉る二十二韻」詩に「書を読みて万巻を破り、筆を下せば神有るが如し」と。○文海 文学の世界。○決 導き治める。○百川 さまざまの学問。○情源之九派 みちあふれる情感のみなもと。王勃の「明員外に上る啓」に見える語。○陸離 さらめくさま。○靈恠 不可思議であやしいこと。○秋琴、

春夢については、後述。○紅紫 色とりどりの花。○緑鬢 つややかな黒い鬢。逍遙のそれをいう。○寸丹 まごころ。情熱。
 45 寄語殘月休長嗟 語を寄す残月長く嗟くを休めよ
 46 我輩亦是艷生涯 我が輩も亦是れ艷生涯
 47 只留一點南枝花 只だ留む一点南枝の花
 48 千年潮打磯松沙 千年潮打つ磯松の沙

この詩の内容構成について、ごく簡単にまとめると、およそ次のようになろうかと思う。

先ず第一解において、奇感の士たる狂骨子（逍遙）と有情の人残月子（信綱）とが相会して、それぞれ恋する女性に対する思慕の情を吐露し合うのだが、側で話を聞いている夫人や従妹の反応は極めて冷淡である。されば逍遙は自分たち二人の真情は自分たちにししかわかるまいと思うのである（第一句～第二十二句）。次に第二解で、逍遙はかつて別れた恋人のことを憶い出しはするものの、現在の自分は美しい南家の女（貞子）をひたすら愛しているのだと、夢見心地に述べる（第二十三句～第三十四句）。だが、その人の心をわがものにすることはできぬ。そこで第三解になるとトーンが変わって、残月子たちが帰った後、うちに心緒乱れて眠れぬ夜を過す逍遙の姿が詠じられている（第三十五句～第四十四句）。されど結局第四解において、自分の愛する人は貞子しかいないし、残月子には磯馴松と呼ぶ女性しか存在しないのだと気を取りなおし改めて決意するのである（第四十五句～四十八句）。

故郷の恋人

以上、「狂殘痴詩」其六について紹介して来たが、ここで注目しておきたいのは、第二十三句から二十八句にかけて詠じられている女性の存在である。恐らくこの人は、逍遙が故郷宇和島に残して来た〈故郷の恋人〉であろう。それはまた、彼が「可憐子」「龍胆」の名で呼ぶ女性と同じ人であるに違いない。

〈故郷の恋人〉のことは、前稿「『逍遙遺稿』札記——故郷の恋人のこと他——」（椋山女学園大学短期大学部二十周年記念論集）平成元年十二月）においてこれを論じ、その際、「狂殘痴詩」其八に「少稚曾て分かつ秋月の襟、龍胆花は摧く予州の丘」とある例などから推測して、「その人が明治二十五年秋頃には既に結婚して（あるいは夭折して）逍遙の手の届かぬ人となった」のではないかと想像したが、この「狂殘痴詩」其六に「玉鏡忽ち破れて春色移り、百年の金誓渾べて悲しむに堪へたり」と詠じていることからすれば、たんに幼なじみの女性であるというにとどまらず、逍遙の婚約者もしくは許嫁であったと見る方がよいと思う。そして、この二句では、二人の結婚の約束が反故になったことを述べているのであろう。

更に言えば、この婚約の破棄は、逍遙個人の側から一方的に申し渡されたもので、明治二十五年八月逍遙が帰省した時のことであつたように考えられる。^{（注9）} というのは、『逍遙遺稿』正編に収められている「明治廿五年八月郷に帰る」詩とそれに続く「郷を發す」詩との間に大きな心理的落差乃至断絶が感じられるからである。

前者においては、先ず「朝に發す紛華の地、夕に投ず閑幽の郷。紅塵我を追はず、白雲旧岡に帰る」と詠じられ、都塵を通れ心の安

らぎを求めて帰省する逍遙の姿を見出すことができる。昔とかわらぬたずまいをのこす故里の我家に辿りつけば、幼い弟妹や優しい両親が首を長くして待っており、「弟妹敝履を解き、喜々として寧康を賀す。慈親園蕪を調へ、歓喜して酒漿を列す」るのであった。そして歓待してくれるのは家族ばかりではなく、「故人旧契を記し、来りて叩く読書の堂」。友人達も聞きつけて訪ねてくれる。されば逍遙は、故郷の人々の暖かいもてなしに、今更ながら東京遊学中の自分に対する期待の大きさを肌身に感じて、「丈夫の任本より重く、志気堅且つ剛。学問は不朽の業、須らく国家の光を揚ぐべし」との決意を新たにし、使命感に燃えるのであった。郷土の声援期待を一身に負い、それに応えるべく孜々として学問に励むことこそ、自らの経世の志を実現しひいては国威を発揚する道ともなるといふ、地方出身の秀才の大半が持っていたエリート意識を逍遙は帰省中にくすぐられたのである。そこには、何ら心情的な驕りは見られない。

ところが、休暇を終え再び東京に出立する頃となると、雲行きは一変した。後者の「郷を発す」詩は、「十里の家山吾れを容れず、又狂骨を抱いて征途に上る。美人泣いて訴ふ百年の恨み、雲は慘澹たり離亭の晩」云々と詠じられ、最後に「秋風明月人髪を啼くす、嗚呼人世讀書子と作る莫かれ」と結ばれている。逍遙にとって本来のどかな白雲郷であるはずの郷里に彼らが身の置きどころなく、ひとり暗澹たる思いを胸に抱いて上京せざるを得なくなったのである。泣いて「百年の恨み」を訴えた美人は、破鏡の憂き目に遭った婚約者であったに違いない。そして、この女性をめぐって、郷党との齟齬軋轢が生じたのではあるまいか。

東京で南条貞子を見知った逍遙の眼には、貞子が和歌を詠み琴を弾くのみならず、新しい高等教育を受けているという点で、理想的

な女性に映ったのに対し、〈故郷の恋人〉の方はただ温順なだけが取柄の女にしか見えなかったであろう。それ故、貞子に恋する以前は、しばしば思い起されていたこの人も、貞子への思慕がつのつてゆくなかでしだいにその影が薄れていったのである。だからといって、逍遙自身帰省以前に婚約の破棄まで決意していたかどうかはわからないが、先に挙げた「八月郷に帰る」詩の調子からみれば、深刻な悩みを抱いて帰省したとは思われず、彼は結婚の約束といつてもそれ程重い意味を持つものとは受けとめていなくて、どちらかというと、幼なじみの感覚でこの女性を見ていたのである。だが、帰省中にはからずも口を衝いて出た一言が事態を大きく変えてしまった。それを聞いた親戚知友は驚きあきれ、非難の声が一斉に彼に集中したのである。具体的な事柄は何一つとしてわからないけれども、想像すれば以上のようなことになるうかと思う。

結局のところ、逍遙にとってみれば、〈故郷の恋人〉は幼なじみとしてかなりの好意は持っていたとしても自覚した恋愛の対象とはなり得ず、気にかかる存在ではあっても情熱を迸らせる相手ではなかったということである。その人のことが気の毒にもいとおしくも思えたとしても、貞子に対する恋心はそれにもまして熾烈であった。そして、逍遙には自らがその女性を裏切ったというような罪悪感はない、却って彼女ならば心のどこかで自分の行動を理解してくれているのではないかと思うような甘い期待すら、ほのかに抱いていたように感じられる。だからこそ、逍遙が貞子への思い破れ、精神的に八方塞りの状況に追いつめられた時に、その優しい面影が再び蘇って来たのではなかったか。そのことはともかくも、ただこの帰省中に逍遙が身をもって味わったであろう郷党との心理的対立葛藤は、「郷を発す」詩の「狂骨を抱く」という表現からも端的に窺われる

し、彼が自ら「狂骨子」と称するに至ったのは、この明治二十五年夏の出来事が大きな契機となっているように思われるのである。

春 夢

「狂残痴詩」其六には、南条貞子と今述べた〈故郷の恋人〉の他に、実はもう一人、別の女性が姿を見せている。その女性というのは、第四十一句、四十二句に、「秋琴台畔風露沈み、春夢閣外紅紫褪す」と、〈秋琴〉と対偶をなして詠じられている〈春夢〉のことである。先の語釈には示さなかったが、〈秋琴〉は南条貞子を指す。彼女が琴を善くしたことから、かく言うのであろう。

では、〈春夢〉とは一体誰か。この女性の名は、明治二十五年作の「春夢女史に別る」二首（正編）を始めとして、『逍遙遺稿』中にしばしば見えているものの、如何なる女性で逍遙とどういう関係にあるのかについては、従来具体的には全くわかっていなかった。その点を明らかにされたのが原田憲雄氏である。原田氏は、昨年「方向」第一一一号（平成二年三月 方向社）に「中野逍遙『遺稿』中の『春夢子』など」という論考を発表されて以来、春夢子及びその周辺に関する新資料を発掘され、秀れた研究成果を同誌第一一二号及び第一一九号以降に陸続として掲載されている。それらの研究に拠れば、〈春夢〉は、本名坪井すむといひ、紀州新宮の元藩医坪井蜂音庵（『逍遙遺稿』に蜂音庵と作るのは誤りである）の女で、明治六年生。逍遙よりは六歳年少となる。明治二十四年六月、女子学院（入学時は桜井女学校といった）を卒業。その後、甲府の山梨英和女学校で教鞭を執ったことがあるという。逍遙が二十歳の頃、十三・四歳のすむに漢学を教えていたらしい。明治二十五年頃、すな

わら「狂残痴詩」を書いた頃の逍遙にとってこの女性は、原田氏の言葉を借りて言えば、「愛すべきではあっても、親しすぎて、恋愛の対象とは考えにくかった」^{（注1）}ようだ。思うに、逍遙は何でも話せる妹のような感情を持っていたのではなからうか。

尚、坪井すむは、逍遙の歿後、『誰が罪』という小説を書いている。この作品は、長らく筐底に蔵されたままになっていたが、これも原田氏の手によって翻刻され、「方向」誌上に発表された。その内容は、坪井すむをモデルとする藤井倭文子^{（注2）}が、中野逍遙をモデルとする岡野一郎に英書を習うことから端を発し、やがて数年の後、倭文子にいつしか好意以上の愛情を抱くようになった岡野は、紀州に帰郷中の倭文子のもとを訪れ、自分の気持ち打ち明け妻になってくれるよう望むが、彼女の方は岡野を友だちか兄のように慕ってはいるものの、男女の愛情として意識しておらず、思いがけない告白に気も動揺してしまつて、これを拒絶する。東京に戻った岡野は失望のあまり熱病に罹つてあえなく死んでしまう。彼からの最後の手紙を受け取り、更にその死を知った倭文子は、岡野の純粋な思いに心打たれ、彼の申し出を受け入れられなかったことを後悔する、といったものである。

この小説は、あくまで坪井すむの視点から書かれた作品で、どこまで事実が踏まえられているのかよくわからないものの、〈春夢〉と逍遙との実際の交際の様子や二人の心情の機微をかなりよく伝えているように思われる。ただ、「狂残痴詩」が書かれた時点では、先にも述べたように、逍遙にとつて〈春夢〉は自分をよく理解してくれる知己あるいは妹のごとき存在として思い浮べられていたのであらう。

艶生涯

「狂痴詩」其六の第四十五・四十六句に「語を寄す残月長く嗟くを休めよ、我が輩も亦是れ艶生涯」という表現がある。この二句は、島崎藤村の「哀歌」の詞書にも引用されており、中学時代に「哀歌」によって中野逍遙を知って以来、『逍遙遺稿』を愛読したという吉井勇の歌の中にも「艶生涯」の語が用いられている。

われもまた艶生涯とみづからの傳に書けどさびしきが世はこれをしも艶生涯と云ふべくあまり寂しきが世なるかも世をそむき佗^{（注13）}居しをればみづからの艶生涯も寂しとぞするとの例である。

ところで、実は、この「艶生涯」という語は、私には見なれない言い方で、恐らく「恋一筋の人生」あるいは「恋多き生涯」という意味であろうと見当はついているものの、この言葉が既に中国の詩文において先例のあるものなのか、それとも中野逍遙の造語なのかということになると、さっぱりわからないのが現状である。先に「狂痴詩」其六の全文を掲げた際、語釈に挙げておかなかったのもこのためである。

思うに、艶という字はつやつやとした女性の美しさを言うのが本来の字義であって、とりわけ人について言う場合、女性に關した形容語として用いられ、そこから更には男女の情愛についても言うようになるのだが、男が自らの生き方について「艶生涯」などと言うことは、中国ではその例を見ないのではないかと勝手に想像している。

ただし、「艶生涯」に類似した言い廻しそのものがないわけでは

ない。清の張船山（名は問陶）の「九月一日洄瀾寺晚眺、遂に薛濤井を訪ぬ」詩二首其二（篠崎弼校点『船山詩草』二集卷三）に「古井澄むこと千尺、名箋豔一生」という句があつて、そこに「豔一生」という言葉が使われている。薛濤箋にその名を留む唐代は蜀の名妓で詩を善くした薛濤について、艶福に彩られた風流な一生を送ったと見なしているのである。尚、因みに言えば、張船山の詩は中野逍遙がこれをよく読んでいたらしく、前稿『逍遙遺稿』札記——故郷の恋人のこと他——で取り上げた正編の「將に東都に向はむとして留別す」二首其二に「秋風吹いて蛾眉の面を湿らす、酔ふて水天を指せば天尽くる畔。憐れむ君が一点涙香の痕、染みて客衣に入るも澣ふに堪へず」とあるのは、その転句結句の言い廻しを、張船山の「嘉陵江上立春内に寄す」詩六首其五（篠崎弼校点『船山詩草』卷三）の「客行日已に遠く、碧草新愁滿つ。香淚征衣に在り、君に因りて澣ふに忍びず」から学んでいるように思われる。それはともかくとして、張船山の「豔一生」という語は、女流詩人薛濤の身の上に関して用いられており、男性が自らについて言う用例ではない。だが、「艶生涯」の語が中国の詩文に先例があつてもなくても、この言葉で逍遙がいかに自らを表現したか、あるいは表現しなかったかということを考える方が重要であろう。その点に關して言えば、「語を寄す残月長く嗟くを休めよ、我が輩も亦是れ艶生涯」という二句について、これを「自身の優雅な生活に自足している心情を述べたもの」とみる関良一氏の解釈や「名残りの月に思いを寄せていたずらに嘆くことはない、自分だつて優艶な日々を過している」とする三好行雄氏の説明は、いずれも全く焦点がずれているとしか思えない。とりわけ、三好氏が「残月」を「名残りの月」と解しておられるのは、甚だ奇異に感じられる。そして、両氏ともにこの二句

には逍遙の満ち足りた心情が述べられていると見ておられるのも不可解だ。たぶん、「哀歌」の詞書に引用されている二句だけを取り上げて解釈されようとしたからで、「狂残痴詩」其六全体を読んだ上の理解ではあるまいと思う。私には、この二句に逍遙の悲壮なまでの決意が込められているように思えてならない。かつて吉井勇は「ふたなさけ二人をおもふ恋のためわが身ひとつの置きどころなき」と詠んだことがあるが、「狂残痴詩」を書いた頃の逍遙はそれとは違って、一途なまでに南条貞子を恋い焦れていたのである。ひたむきで純粹な思い故に、振りすてた女性もいる。だからといって、貞子の心を獲られるというわけではないかも知れぬ、だがやむにやまれずすべてを捨ててまで、ひたすら貞子のことを想わずにはいられないのである。それ程までに逍遙の貞子に対する恋着は深く切ないものであった。けれどもその人は自分に見向きもしない。愛する人をわがものとすることができず憂悩煩悶を繰り返すうちに、貞子への恋に生き恋に悩むことそれ自体が、「艶生涯」としか言いようもないものであって、自分の生きる道はこの恋一筋にしかない、逍遙は心に決めたのではなかったか。それは悲しいばかりの決意であり覚悟であった。されば、わがまごころのすべてを傾けてその人を生涯愛そう。今はよしんば相手に胸の中をわかつてもらえないとしても、自分はあくまで貞子一人を想いつづけよう。そして、残月子よ君はいつまでも変ることなく房州の彼の人を愛しつづけよ。それこそがわれら二人の生きてゆく証しそのものなのだ。そういう悲痛な叫びを逍遙は発していたように思える。その意味では、同じ「艶生涯」の語を用いても、吉井勇の場合には華奢風流、耽美放蕩の色あいであっても感じられるのに対して、逍遙のそれは全く情調を異にするものであった。

注

- (1) 今戸には旧宇和島藩主伊達家の邸宅があり、逍遙の母親の兄弟宇都宮綱条は伊達家に勤めていた。
- (2) 佐佐木信綱『明治大正昭和の人々』(昭和三十六年一月 新樹社) 中野逍遙の条に「君は實に、自分にとって益友であり、心友であった」と述べられている。
- (3) 「狂残痴詩」十首其九に「残月子は歌林の名材、洛陽の月旦俊髦を推す」とある。佐々木信綱は明治二十三年、十九歳の時に『日本文範』上下を処女出版し、同年十月から翌年十二月にかけて父弘綱と共編で博文館から『日本歌学全書』を刊行するなど、早くから歌学者として旺盛な活動を始めていた。
- (4) 高橋作衛「逍遙遺稿の後に書す」(『逍遙遺稿』雑録所収)。
- (5) 不破信一郎、明治二十八年十月七日附正岡常規宛書簡(『子規全集』別巻一 昭和五十二年三月 講談社)。この手紙は、『逍遙遺稿』の編纂刊行に際して、子規に追悼文の寄稿と出版義捐金の醸出を依頼したものである。
- (6) 「狂残銷魂録」第一に見える。
- (7) 川田順が「おもひ草評釋」を「心の花」に連載していることは、信綱も当然これを知っていた。『作歌八十二年』の昭和二十八年、八十二歳の項に「心の花に、川田順君は『おもひ草評釈』を寄せられ、廿九年五月まで十三回を執筆せられた」と回想されている。信綱の側から、この時何らかの反応なり注意なりがあってもおかしくはないはずだが、彼には自らの若き日の恋について、それを明らかにするのが憚られる事情もしくは自身の感情があったのかも知れない。もっともその後、川田順も「思草以前の先生」(『心の花』佐佐木信綱先生追悼號 昭和三十九年四月號)と題する一文では、「先生は又戀歌もたくさんお作りになり、荷田春満の如き野暮な學者ではなかった」とし、「共に見し沖の小島の磯馴松秋風いかに寒く吹くらむ」の歌を他の三首とともに挙げ、「令室となられた雪子夫人の處女時代に贈られたものもあるうか」と述べてはいるのだが。因みに、雪子は外交官藤島正健の女で、明治七年生。同二十五年竹柏園に入門し、二十九年に信綱と結婚した。
- (8) もっとも、「狂残銷魂録」第二に「語を寄す残月近ごろ如何、筆下定めて烟霞の纏る有らん。許嫁の夫十年の恋、何ぞ稿を脱して故人

に示さざらん」と言うことからすれば、たぶんこの推測は誤っているだろう。ただ、「許嫁の夫十年の恋」が具体的にどういう内容を目指すのか、現在のところ私には全く不明である。佐々木信綱と藤島雪子とが許嫁であったかどうかとも確認できていない。どなたか御教示賜われれば幸いである。それにしても、「磯馴松」と呼ばれる女性、雪子ではなかったように思われる。

- (9) 「狂残痴詩」其六と「故郷の恋人」とを関連づけて論じたものではないが、「故郷の恋人」が逍遙の婚約者であったと見るべきこと及び明治二十五年八月逍遙の帰省中に婚約の破棄が申し出られたと考えられることについては、既に原田憲雄氏が「郷を発す」詩を引いてこれを指摘されている。「春夢女史と南子の歌(四)六、近代詩人中野逍遙」(「方向」第一二二号 平成二年十一月 方向社)。尚、原田氏によれば、正式の婚約破棄は、明治二十六年八月であったという。
- (10) このこと、拙稿「逍遙遺稿」札記「故郷の恋人のこと他」——参照。

- (11) 「春夢女史と南子の歌(二)」——「中野逍遙」補遺——「(方向」第一二〇号 平成二年十月 方向社)。

- (12) 「(方向」第一二六号(平成三年三月) から、同第一三一号(平成三年六月)にかけて連載されている。

- (13) このこと、拙稿「逍遙遺稿」札記「秋怨十絶其七について」——「椋山女学園大学研究論集」第十九号第二部 昭和六十三年二月) 参照。

- (14) 中国における艶の語義とその展開については、梅野きみ子氏の『えんとその周辺——平安文学の美的語彙の研究——』(昭和五十四年二月 笠間書院 第一章「えん」考に詳叙されている。

- (15) 『日本近代文学大系15 藤村詩集』(昭和四十六年十二月 角川書店 頭注。

- (16) 筑摩全集類聚『島崎藤村全集1』(昭和五十六年三月 筑摩書房)

〔訂正〕

前稿「逍遙遺稿」札記「故郷の恋人のこと他」——「椋山女学園大学短期大学部二十周年記念論集」平成元年十二月) には、次のような誤字脱字の箇所があったので、この誌面を借りて訂正させていただきたいと思う。

二頁 (三四三)	二行目	藤木博美 ^訂 →藤本博美 ^正
十二頁 (三三三)	一行目	つめぬ↓つけぬ
十五頁 (三三〇)	十三行目	読んでいた↓読んでいた
十八頁 (三二六)	七行目	願い↓願ひ
二二頁 (三二四)	八行目	笹淵友一↓笹淵友二氏
	八行目	(25) ↓ (24)
		(一九九一・九・八)